

説教

殺すなれ／傷につらなる

<ヨハネによる福音書20:19~23>



横須賀教会 金迅野 牧師

（この説教は、2025年8月30日に行われた「関東大震災朝鮮人・中国人虐殺犠牲者102年キリスト者追悼祈祷会でなされたものです。）

1. 関東大震災100周年のときに東京の活動団体「ほうせんか」のなかに若者のグループ「100年（ペニション）」が誕生した。彼らが100周年に際してつくった詩には、「殺された人たちは証言できない」「私たちは殺されたあなたの名前すら知りません」「あなたは誰ですか」という通説な言葉が刻まれている。いま、それらの「言葉」と「私」の関係を考えてみたい。

「在日」である私は、あなたは、彼らのことを知っているのだろうか。名前も年齢も出身地も定かでない方々のこと、彼ら彼女らがどのような日常を送っていたのかということを。そのような私たちが、102年を経た今日、自らのなかに思いもかけずヒリヒリするような皮膚感覚を覚えている。数年前にヘイトデモに直面した「在日」が、倒錯して叫んだ言葉「天皇陛下バンザイ！！」にはどのような思いが横たわっていたのか。参議院選挙の演説の聴衆がカウンターに語った「十五円五十銭と言ってみろ」の声を聞いた瞬間にからだに走った戦慄。からだの奥底にある傷がうずくような感覚のなかで、私たちは今日を迎えている。

2. ところで、「傷」をめぐるモーセのアイデンティティを考えてみたい。（1）エジプト人としてのアイデンティティに刻まれた「不純」という傷、（2）その傷が転移して、「同胞を攻撃したエジプト人」を殺害したという傷、（3）亡命した先で異邦人と結婚して生まれた子どもを「ゲルショム（そこで根なし草）」と名付けたという傷、（4）そのような複合的な「傷」を持つモーセが招かれ、十戒が与えられたということ。それでは、今日を生きる私たちの「傷」とはなにか？いまを生きる「私」の傷と、102年前に虐殺された「あの人」の傷、そしてモーセの傷の間に、どのようなつななりが可能なのか？

オーストラリアの歴史学者のテッサ・モーリス・スズキは、自分が犯したのではない歴史的な残虐行為について「罪」はないが、しかし、そのような歴史の重なりの上に生きる者として自分と関係なしとはできないのであって、いま自分が享受しているすべてのものが歴史のうえに成り立っていることの「責任」があるということを“implication”（連累）という言葉で表現した。私たちは今日、そのような「連累」（「なかったことにされようとしている存在の声なき声）が投げかけてくる「問い合わせ」をなかったことにしようとして、自分にゆらぎと葛藤と責めをもたらしすものとして排除しようとするマインドに至るのか、そうではなくて、「世界には自分とは違う痛みがある」という感覚から「連累」に埋め込まれている傷を受け止め、自分のなかに刻まれた「傷」と連ねようとしてすることによって、

共に生きることを目指すのか。私たちは、そのような分岐に経っていると言える。

3. 米国の神学者ハワーワスは、「自分のなかに物語がない者は、たまさか掴んだ物語を唯一の物語として信じる」という意味のことを記したことがあるが、デマを信じた「ふつうの人々」が102年前に多くの朝鮮人や中国人や障がい者や東京の言葉を話さない人たちを殺害するに至ったのは、権力が流した似非の「物語」を「唯一の物語」として信じてしまったからにほからぬ。

102年前に起きたことと、「いま」はつながっているのではないか。今更のように語られ始めた「日本人ファースト」という言葉は、1965年の「日韓国交正常化」にともなって創出された「韓国籍」の余白として取り残された朝鮮（籍）という存在について「煮てくおうと焼いて食おうと自由」と放言した法務省官僚のマインドに宿っていたものであつたし、1979年に凄まじいじめによって自死した在日コリアンの林健一君の死後、いじめにかかる中学生の「だって朝鮮人にはなにしてもいいってことになってたよ」という言葉にも引き継がれていたものではなかったか。

4. 殺人を犯したモーセに神が十戒を託されたのはなぜなのか。ヘブル語の禁止を表す「ロー」という言葉には、「するはずがない」という意味が横たわっている。十字架に架けて殺した人々の上にも「殺すなれ」という神の言葉は響いていたはずではなかったか。その「連累」のうえに、イエスは、十字架の傷をとどめたままの姿で復活されたのだ。それは「殺すなれ／殺すはずがない」というみ言葉に刻まれた、禁止と期待の文脈の復活でもあったのではないか。

復活のイエスは、自分の殻に閉じこもり恐怖におののく弟子たちの前に顯れて、「あなたがたに平安があるように」と語りかけた。生前のイエスが、自らをぶどうの木にたとえていたことを想起するならば、このとき、イエスは、ご自身の「傷」と、弟子たちの「傷」をつらねるように誘われたのではなかったか。ご自身の傷と人間の傷が、イエスの両手を通して結ばれるとき、私たちは、復活のイエスを通して、他者の傷／痛みとつらなることができるのではないか。私がつかむイエスのもう片方の手の先にはきっと、102年前に虐殺された人々の手が佇んでいると信じる。

百年（ペニション）の詩は「来年もあなたにここで会いたい」という言葉で閉められている。復活のイエスのからだにとどめられた「傷」を通して、さまざまな人間の傷と痛みがつらなることで「出会い」が生じる。イエスとの出会い／出会い直しを通して、来年もまた会える私たちであろう。



KCCJ人権シンポジウム開催 「共に生きるいのちの天幕をひろげよう!」

第20回KCCJ人権シンポジウムは、9月14～15日、「共に生きるいのちの天幕をひろげよう！—宣教120周年に向けてKCCJの現在と未来を考える」を主題にKCC会館にて開催された。

14日午後7時には、ハイブリッド形式で行われた李清一牧師（KCC名譽館長）による記念講演「人権シンポジウムとKCCJの宣教」があり、42名が参加した。

15日には、遠近各地から31名余りが集い、午前10時の開会礼拝（梁栄友総会長説教）を皮切りに、RAIK顧問の佐藤信行氏による「戦後80年、在日コリアン移民の現在」、宣教委員長趙永哲牧師による「宣教120周年に向けてKCCJの現状と未来を考える」、教育委員長金迅野牧師による「信仰の継承」と「聴くことのちから」、全国女性連合会総務石橋真理恵伝道師による「師母」、社会委員長申容燮牧師による「在日大韓基督教会の社会宣教的課題についての提言」などの発題が続いた。その後、約1時間にわたり発題に対する質疑応答の時間を持ち、閉会礼拝（新井由貴牧師説教）をもって全ての日程を終了した。

今回の八人権シンポジウムは、今総会が抱えている課題を改めて確認しつつも、「絶望」ではなく「希望」を期待させる意味ある時間であり、宣教120周年を迎えるあたりビジョンを共有できる機会となった。出席が難しかった牧師や信徒のために報告書を作成し、各教会に配布する予定である。これを通じて、参加者が分かち合ったビジョンと希望が全教会にも伝わることを願っている。



第4回常任委員会開催

第58回定期総会への献議案などを審議

第57回総会期第4回目の常任委員会が、2025年9月16日（火）在日韓国基督教会館（KCC）で開催され、常任委員24名の中、20名、特別委員長1名が出席して各種報告や案件審議などが行われた。主に第58回定期総会に上程される献議案を審議した。主な献議案は以下の通りである。

- (1) 前総会神学校と西新井教会との「共同委員会」設置の件。
- (2) 在日大韓基督教会「宣教120周年」2028年の準備委員会組織の件。
- (3) 中部地方会の規則変更の件。（地方会定期総会開催日調整）
- (4) 東京第一教会宗教法人規則変更の件。（責任役員人數）
- (5) 関東地方会規則変更の件。（規則第4章第11条と第12条部署の増減）
- (6) 教役者退職後の支援給付金規則改正の件。
- (7) 総会規則第17条変更の件。（規則第17条、関東、西南地方会における行政地域追加）
- (8) 牧師/長老視務延長の件。（憲法第27条5項および憲法33条4項）
- (9) 兼務牧師に関する件。（憲法第24条 牧師の招聘）
- (10) 憲法規則等改正検討委員会から上程案の件。
- (11) KCC、RAIK、西南KCC理事承認の件。



壮年会一日研修会を開催 27名が集い靈的な力が増す貴重な体験

9月15日、2025年度西部地方会壮年会一日研修会が武庫川教会で開催された。名古屋グレーストゥルースチャーチ元老牧師の李鍾河牧師を講師に迎え、27名が参加した。

開会礼拝は、西部地方会壮年会会长梁昌熙長老（武庫川教会）の司会で進み、「私が父（夫）です」（創世記3：1～15）と題する李鍾河牧師の説教があった。引き続き、第一講演では、「私はなぜ今、日本にいるのか」（創世記45：8）という主題で、心配しそうに頑張る必要はない、すべてを主に委ねて神を楽しむことが大事と伝えられた。

昼食後第二講演では、「実力あるクリスチャン」（第一コリント9：18～23）という主題で、見える世界ではなく、見えない世界、すなわち靈の世界を第一にしようとのメッセージが伝えられた。

講演後、尹聖哲長老（神戸教会）の司会でディスカッションの場が持たれ、参加者から神の国・靈的な世界に関する身近な疑問・質問が多数投げかけられた。皆の心が燃え立ち、靈的な力が増し加えられる尊い研修会であった。（報告：林英幸）



讃美とみ言葉の夕べ開催

東京教会に270余名が集まり讃美

関東地方教会女性連合会の主催で2025年の「讃美とみ言葉の夕べ」が9月21日（主）、3時30分から東京教会において14の教会、270人以上が参加で開催された。

1部「開会礼拝」は、具滋佑牧師（東京希望キリスト教会）による「シオンにおられる神を賛美せよ」（詩編99：1～3）という題目で説教が行われ、神様を讃美する意義について御言葉から学んだ。

2部「讃美の夕べ」では、楽器演奏を交えた讃美や多様な年齢層の教会員による讃美など、アイデアを凝らした思い思いの美しい讃美を神様に捧げた。多くの拍手と声援が送られ、感動の讃美が続いた。

プログラムの中ほどでは森下滋牧師（日本基督教団）によるジャズピアノの特別演奏があり、力強いジャズ演奏に皆が酔いしれ、感動の時間をもつことができた。各教会からの讃美がすべて終わったのち、プログラムの最後として、参加したすべての教会がひとつになり、「ここに集った私たち」を声高らかに合唱した。心を一つにして捧げた私たちの讃美は、神様も大いに喜んでくださったものと思う。

なお今年は順位付けを行わず、参加したすべての教会に等しく参加賞が贈呈された。

（報告：会長 李銀珠）



関東大震災朝鮮人・中国人虐殺102年 キリスト者追悼集会開く

去る2025年8月30日、「関東大震災朝鮮人・中国人虐殺100年キリスト者追悼集会」が日本キリスト教会館で行われた。

日本キリスト教協議会（NCCJ）の「東アジア和解と平和委員会」主催で行われた今回の追悼祈祷会には、カトリック教会を含む日本の諸キリスト教会から134名（その中オンライン参加者76名）の参加者が厳粛に行われた。

説教者として金迅野牧師（横須賀教会）は「殺すなけれ／傷につらなる」（ヨハネによる福音書20：19～23）という題で語られた。

各参加教団、団体による追悼祈祷に在日大韓基督教会からは李銀珠勧士（横浜教会、関東地方教会女性連合会長）が担当された。特に今回の祈祷会にはラッパーの「フニ/郭正勲」さん

によるラップも行われ、在日3世としての証と今日の日本社会で起きている社会的な問題を語られた。

最後に「声明文」朗読があり、この社会で「標敵」となり犠牲者となる人々と共に生き、共に苦しみを担う道はイエスが歩まれた道であると信じ、集まる私たちがイエスを信じる信仰を証しし、共に苦しみを担う道を歩むことがつよく訴えられた。



信徒委員会主催行事の報告(7月～9月)

1. 青年主日記念礼拝＆交流会が盛り上がる

昨年、制定70周年を迎えた青年主日を今年度も青年会活性化のための活かそうと、7月13日に関西地方会において青年主日記念礼拝＆交流会（於大阪教会）を実施した。記念礼拝には102名が出席し、交流会では青年50名含む70名が参加するなど大いに盛り上がった。特に礼拝においては平野教会青年会による迫力ある信仰劇、そして圧巻の讃美が全体を喜びに包み込むなど恵みに預かる機会となった。交流会では在日韓国人・日本人・駐在韓国人・ベトナム人の青年たちが積極的に交わりの時を持ち、今後も継続した交流と関西地方青年会連合会（関連）再建について話を咲かせた。



2. 全国青年セミナー（オンライン）が開催される

全国青年会（全協）が休止状態の中で従来の青年研修会や修養会に代わる行事の必要性から、信徒委員会が代わりに青年が集う学びの機会を作るべく、「信じる気持ちと生きる力」をテーマに8月30日にオンラインで金聖泰牧師（東京教会副牧師）を講師にした全国セミナーを実施した。当日は青年含め40名の視聴参加があり、金聖泰牧師のメッセージのほかに東京教会青年会の報告、またグループ討議などを行った。

青年たちからは「教会青年の出会いとつながり」の居場所づくりや「希望としての信仰」を育むことの必要性が話され、青

年と共に牧師・長老・信徒の責任の大きさを痛感させられた。

3. 全国青年セミナー（対面）が全国二ヶ所で実施!!

8月オンラインに続いて対面式の全国青年セミナーが9月14日は東日本（於東京教会）、21日は西日本（於大阪教会）の二ヶ所で実施された。東日本（担当：金聖泰牧師）では関東地方の青年たち11名が集い、青年会活動の悩みや楽しみを共有しながら関東地方青年会連合会（関東連）の再建が話題となり、今後ゆるやかな取り組みながらも青年会の発展をめざすことが話された。

また9月21日西日本では梁陽日長老が講師となって、神様に与えられた生命・生涯を大切にすることを実感するリラクゼーションを体験した。当日は22名参加の中に西部地方からも青年が参加して、関西と西部の垣根を超えた楽しい交わりの機会にもなった。

4. おわりに

これら青年育成・青年会支援を目的とした信徒委員会の取り組みは、一進一退（一喜一憂）を繰り返すハードなものではあるが、それでも希望を失わず各地方・教会にある青年のために働くことは未来の教会発展のための大いなる種まきだと心から信じます。あらためて全国の教会関係者の皆様に感謝と変わらぬご協力をお願い致します。

（報告：梁陽日信徒委員長）



韓日対照讃頌歌販売



韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。
●B6版変型・1483ページ
●価格：2,500円（消費税・送料込み）
※お求めは総会事務所へ

韓日対照聖書販売



各ページの左に韓国語（改革改訳）、右に日本語（新共同訳）が掲載されています。
●A5版変型・1760ページ、革製
●価格：4,000円（消費税・送料込）
※お求めは総会事務所へ

関東大震災朝鮮人・中国人虐殺犠牲者102年 キリスト者追悼祈祷会声明文

私たちは、今日ここに、関東大震災虐殺102年を迎えるにあたり、6000人以上の朝鮮人と700人以上の中国人が関東全域で虐殺された事実に向き合うために集まりました。

1923年9月の関東大震災虐殺は、1910年の韓国強制併合の以前から、植民地支配に抵抗する朝鮮民衆運動を日本軍が「討伐」という名によって「殲滅」殺戮し、さらに三・一独立万歳運動(1919年)を「不逞鮮人」暴動として軍と官憲が7,000人以上の民衆を惨殺しながら弾圧した植民地支配の延長線上に起こりました。関東大震災虐殺は大震災直後の何の根拠もない流言蜚語をきっかけに「不逞鮮人暴動」を理由として天皇の勅令による戒厳令発布(9月2日正午)を契機に戒厳軍と官憲によって始まりました。更に在郷軍人をはじめとする民衆で構成された自警団は、街中の至る所に設けられた検問所で通る人々に「十五円五十銭」と言わせ、濁音をうまく発音できない朝鮮人をあぶり出し捕らえて惨殺した事実を決して忘れてはなりません。

翻ってあの虐殺から102年の歳月を経た今年、去る7月20日投開票の第27回参議院選挙をめぐり外国人への規制強化を多くの与野党各党が競って打ち出す中、あたかも102年前に引き戻されたかのごとく在日外国人への敵愾心をあおる選挙演説の名を借りたヘイトスピーチが日本社会に撒き散らされました。さらに、ヘイトをあおる人々の周囲に集まつた群衆から拍手が起る異常事態となりました。きっかけは「日本人ファースト」を掲げる政党が「外国人は日本人より優遇されている」との事実無根の言説を拡散し、外国人への規制強化を訴えたことから始まりました。事実無根の言説の拡散によって疑心暗鬼と敵意があおられ、それが炎上すればするほど人々の支持を得て議席が伸びるという現実が今の日本社会に進行していることが改めて浮き彫りになりました。

同時に、2023年と2024年に「出入国管理及び難民認定法」が相次いで改悪されました。2023年の改悪では、極めて低い難民認定率の下、3回目以降の難民申請に際しては申請中であっても強制送還の対象となり、送還に応じない人を「送還忌避罪」の罪名により「犯罪者」として処罰するもので、更に2024年の改悪は永住者の永住資格取消事由が拡大されています。いずれも外国人住民に対し「不法」移民と呼び、「違法」を印象づけ、外国人の排除・排斥を法改正によって進めています。政府による外国人排斥の扇動が、一般社会の外国人排斥を誘導してヘイトを引き起こす構造は、102年前に政府による「不逞鮮人」という印象操作の下で震災後の虐殺が引き起こされた構図と重なります。私たちは今、虐殺の一歩手前に立っていることを覚えなければなりません。

2025年、世界のいたるところで排外主義を標榜する集団が姿を現し始め、日本社会においても排外主義の声が強くなろ

うとしています。社会の多数派とは異なる文化・習慣・背景を持つ人々への排撃・抑圧は、社会的少数者だけの危機ではありません。排外主義が市民社会全体を蝕む時、社会は急速にファシズム化して戦争へと進み、必ず遠からず崩壊に至ることを近現代の歴史が実証しています。そうであるからこそ、世界平和を希求する国際人権諸条約は排外主義と差別を許さないための法整備をその批准国に対して求めています。しかし日本政府は国際社会の一員としてこの義務と責任に未だ応えようとしていません。

7月の参議院選挙の街頭演説を取り囲む群衆の中から、「十五円五十銭って言ってみな」という102年前の虐殺を意図的に連想させる野次までもが出現しました。このヘイトをおおる中心の演説と、それをはやし立てるように取り巻く群衆の姿は、102年前に銃・日本刀・鳶口をもって捕らえられた朝鮮人たちを惨殺する戒厳軍・官憲・自警団員という暴虐の中心を、群衆がはやし立て取り囲んだ虐殺現場の光景と重なります。その同心円の外側には、虐殺に加担もせず、しかしその暴虐を諫める声も上げず、背を向けて黙認する人々が存在しました。この暴虐の同心円が、今も私たちの生きるこの社会にも息づいていることを覚えずにおれません。そして私たちはさらにキリスト者として、イエスが捕らえられたのち、三度も「あの人を知らない」とイエスとの関りを否認したペトロを思い浮かべつつ、あの102年前（注）も、そして今も、キリストの教会はどこにいて、何をしていたか、という問い合わせの前に立たれます。

私たちは、教会が呼び集められ遣わされた世にあって、十字架のイエスを黙想しつつ、今、この社会に噴き出し広がる外国人排外主義に言葉と行動によって抵抗出来るようにと切に神に祈ります。この社会で「標敵」となり犠牲者となる人々と共に生き、共に苦しみを担う道はイエスが歩まれた道であると信じます。ここに集まる私たちがイエスを信じる信仰を証しし、共に苦しみを担う道を歩むことができますように。

2025年8月30日

関東大震災朝鮮人・中国人虐殺102年追悼祈祷会

(注) 1923年11月に、当時のプロテスタント諸教派が連合して構成した日本基督教聯盟の発足総会の資料にはその二ヶ月前に起こった大虐殺についての言及も追悼の祈りについても何一つ記録として残されていません。当時のそれぞれの教会もその虐殺について敢えて沈黙し記録を残さなかったのか、日本キリスト教史研究の課題といえます。

講壇掛・ストール販売



在日大韓基督教会ではKCCJのロゴ入り
講壇掛・ストールを制作・販売しています。
価格は講壇掛・ストール共4色セットで各1
万円(約半額)
講壇掛・ストール両方ご購入の場合は1万
5千円です。
※お求めは総会事務所へ

讃頌歌委員会より「子どもさんびか」が 発行されています。

主の祈り・使徒信条・交誦文・十戒
集録（いずれも韓国語・日本語）
一冊1,000円
お問い合わせは総会事務局へ
電話 03-3202-5398

